



ユニケオンラインセミナー

F A F、C I P P Sをキーワードに

フォロー、アセスメント、ファイードバックからなるF A Fを通じて処方の適正化に参画することによって、個性を持った専門家になることができる。個性と専門性をかけ算することが唯一無二の薬剤師につながっていく。

狭間研至氏（ファルメディコ株／薬剤師あゆみの会）は、(株)ユニケソフトウェアリサーチが8月5日に開催したオンラインセミナーで「薬局業界にもたらされるパラダイムシフトへの対応」をテーマに講演。薬局3・0やC I P P S、F A Fなどをキーワードに薬局に求められる姿について述べた。

薬局3・0とは、介護施設や在宅ケアなど、調剤や薬の配達にとどまらない地域医療と一体化した新しい世代の薬局。チーム医療の中で、多職種連携や情報共有において、薬学的な見地から処方を検討することが重要。

調剤薬局には3つの限界がある。ま

た、外来調剤のみに依存する経営スタ

イルは破綻しつつある。また、機械や

ICTで代用可能な範囲も明らかにな

ってきており、薬剤師の専門性とやりがいが十分に感じられないという側面もある。さらに、amazonの出現による脅威などがあり、「薬を渡すまでビジネス」は大転換が迫られている。

このようないくつかの脅威に直面している。amazonはまず書店業界に打撃を与えた。全国の書店は半減した。逆に考えれば、半分の書店が生き残ったと言える。地域での立ち位置など、何か生き残る要因があつたはずで、薬局業界

にとつても参考になると考えられる。

新型コロナウイルスのパンデミックは受療行動の変化などを引き起こし、薬局のあり方に一石を投じた。このパラダイムシフト（COVID-19 Induced Pharmacy Paradigm Shift）の頭文字を取ってC I P P Sと名付けた。

医師と薬剤師を分けるものは偏差値などではなく、大学で何を学んだかということ。薬剤師は薬を飲んだあとのことまで学んできている。つまり、薬を出したあとまでフォローすることを学んでいる。薬理学、薬物動態学、製剤学などで学んだ知識を活用して、薬学的専門性を發揮できる。

今、取り組むべきは、業務フローの服薬状況、効果、副作用などに関するフォロー、薬理学、薬物動態学、製剤学に基づいたアセスメント、さらにそれをファイードバックするという一連の流れに従事することで薬剤師としての役割を果たしていく。

見直しと改善、自店なりの積極的な機械化とI C T化、薬剤師を支える人材の育成と投入といった業務改善。内容としては重要だが、薬学的な専門性が低い業務を薬剤師以外の人材に移管することも検討していくべき。